[redacted]

短篇小説

母一人子一人

（上）

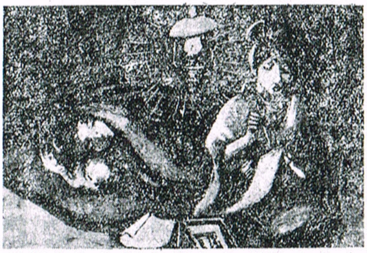
永代美知代

春四月櫻咲くころには、花の都に思つても嬉れしい女學生として――お初は斯う、幾度となく思ひかへし〳〵、一人でそつと微笑むのでありました。

ですけれ共、望は空しく消えて步更ら思ひも設けなかつた事件が湧き出しました。

お初の家は土地でもかなり知られた米屋なのでしたが、三月の末お初がやつと學期試驗を了つた其夜、突然父樣が腦溢血でなくなりました。唯さへ途方に暮れた其中に、お初は引續いて悲しい事ばかり聞かされました。

お初の父樣は、家の者の知らない中に相場に手を出して、莫大な御損をして、二進も三進も動きのとれないハメになつてゐるのでありました。



ですから折角立派に一番の成績を得ながらお初はもう都に遊學など、そんな事を云つてはゐられません。先祖代々住み馴れた家屋敷は人手に渡り、やつと昔の納屋に四五疊の疊をしいて、お初は母樣と唯二人、わびしくも、物悲しい其日を送らねばなりません。母樣は朝早くから夜分遲くまで、人仕事に根をつめ、よくもお體が續く事だと、お傍でお初がはら〳〵する程精出してお働きなさる、そして吐息のひまにはお初を御不愍がりなさる。

「可哀相に、折角立派な成績をとつても女學校へ行く事も出來ず、お前は本當に不運な娘だよ」

お初はさうした母樣のお言葉を聞いたゞけでも胸が塞がつて、心の中では不運な身の上を嘆き乍らも、決して口に出して愚痴らしい事は申ません。少しでも母樣のお手のはぶけるやう、萬事に氣を配つて、家の用事を手傳ひました。

或る夜ふと目をさましたお初は、薄暗い吊りランプの下で、長い〳〵手紙を書いてゐらしやる母樣を見かけました。

母樣は左の手に卷紙を持ち、右の手に筆を執り、昔の人の文かく姿をよく物の本に見るやうな格好で、さら〳〵と一心に筆をお走らせなさる。そして折々涙を拭いては又さら〳〵と、一間よりない、而も狹いお室の事とて、手紙の端は、お初のふせつた床近く、讀めば幾らでも讀まれます。

――お初事田舍には珍らしき出來のよし、校長樣も兼々仰せられ、父存生の頃より、當春こそは是非御地にのぼらせて、ものまなび致させ度存居り、當人も明暮それのみ樂しみに致し居り候らひしが、兎角まゝならぬが浮世とは申せ、かなしきは早くして父失ひしものの身に候、あまつさへありし日に變るわびしき今日此頃、親甲斐もなき我身のみかこたれ候。あはれお初だに世に出し得ば老先き短き我身など、如何やうの苦勞致し候とも物の數かは――

お初は思はず聲を立てゝ泣きました。

「オヤ、如何おしだえ」

母樣は驚いて此方を振向きました。

「母樣、母樣、どうぞもう、何も御心配しないで頂戴」

「いゝえ、母樣は兎に角東京の親類へ頼んで見ます、お前は伊藤の家の後繼者、一生斯うして田舍に埋れてゐてはなりません。れ、お前もどうぞ其つもりでゐて頂戴」

「母樣！」

お初は又しても泣き伏しました。（未完）